

21世紀における日本の対中認識

——外交・安全保障シンクタンクの議論を手がかりに——

Japan's Perception of China in the 21st Century: Based on Discussions from Foreign Policy and Security Think Tanks

徐 涛

本報告は、21世紀における日本の中国認識の変容を明らかにすることを目的とする。具体的には、外交・安全保障分野のシンクタンク（日本国際問題研究所（JIIA）、平和・安全保障研究所（RIPS）、世界平和研究所（IIPS）、日本国際フォーラム（JFIR）、PHP 総研国際戦略研究センター、東京財団、笹川財団）が発表する政策提案や報告書を手がかりに、日本が中国をどのように捉えてきたか、またその認識がどのように変化してきたかを分析する。これらのシンクタンクは政策形成に大きな影響を与える存在であり、その議論を通じて日本の対中政策の方向性やその背後にある認識を読み解くことができる。

まず、2000年代から現在までに発表された主要なシンクタンクの報告書や政策提言を、「中国情勢」「日中関係」「日本の外交・安全保障」「地域秩序・国際秩序」という4つのテーマに分類し整理する。

次に、4つの時期に分けて代表的なものを取り上げ、中国、日中関係、日本の外交・安全保障、地域秩序・国際秩序に関する叙述を中心に対中認識の中身を検討する。具体的には、①中国が潜在的な脅威やライバルとして警戒・懸念されていた段階から、現実的な脅威・ライバルとして認識されるようになっていくプロセス、②日中関係に対する位置付けの変化、③対中政策が積極的な関与から関与・抑止へ、そして関与・ヘッジ・抑止の組み合わせへと変わっていく過程などを考察する。

最後に、対中認識の特徴を抽出したうえで、日本の対中認識の変化が、今後の日中関係の構築にどのような影響を与えるかについて指摘する。